

ツバル語における認識機能と自然環境

— 文化語彙研究の基盤づくりのために —

How the Tuvaluan Language Perceives the Natural Environment: Making the Roadmap for the Study of Folk Terminology

橋 広 司

Hiroshi TACHIBANA

1. はじめに

一般に、ことばの機能としてまっさきに思い浮かべられるのは、伝達（コミュニケーション）機能かもしれない。しかし、ことばにはそれ以前にその根源的機能として、言語外現実を切り分け、人々をとりまく環境を秩序化する認識機能がある。ことばが切り分ける環境とは、いわゆる自然環境にとどまらない。Sapir (1912) がいうように、言語は人間の集団が身を置くあらゆる自然的・社会的背景を映し出す記号の複合体であると考えれば、環境という語のなかに自然的要因と社会的要因の両方を含める必要がある。それどころか、人間にとっての環境とは、ある集団の言語によって認識される限りは必然的に社会性を帯びるのであり、その意味では自然を含むあらゆる環境は社会的であるとさえいえるだろう。

「言語が認識する環境」という考え方は、宮岡 (1996, 2002, 2015) にもみられる。宮岡は、人間集団が身を置いている環境を「自然環境」、「社会環境」、「超自然界」が渾然一体となった環境世界とし、これらは言語によって範疇化された世界であることから「言語生態系」とも呼べるとしている。この考え

方に立脚したとき、たとえば、山も川もなく、農業に適した土もない、動植物の生育にとってきわめて不利な環境に置かれた言語は、混沌とした言語以前の自然環境をいかに範疇化し、秩序化しているのだろうか。また、いかにしてみずからもその一部を構成する社会環境を形成し、幽界・霊界・神話的世界を含む超自然界を構築しているのだろうか。

本研究の目的は、ポリネシアの狭小な島嶼国ツバルにくらす人々が固有の環境世界を構築する仕方を、ツバル語の文化語彙を通じて探ることである。ここでいう文化語彙とは、ある言語社会に固有の単語群や、ほかの多数の言語が共有するものと異なる意味を有する単語群のことである (中川2017)。本稿では、自然環境にまつわる文化語彙を分析・考察の対象とし、ツバル人の生活に不可欠な植物であるココヤシ（およびその果実であるココナツ）を例にとりつつ論を進める。これまで、「言語と環境」の理論に立って、ツバル語の文化語彙を体系的にまとめた先行研究は管見のかぎりない。そこで筆者は、ツバル語の文化語彙の分類体系を明らかにすることで、ツバル人の環境世界のありようを読み解くことを、長期的な研究課題として設定した。本稿

は、その第一歩として、ココヤシに関する語彙研究の成果をいったんまとめ、「言語と環境」の理論的枠組みをよりどころに、今後のツバル語文化語彙研究の基盤構築をめざす。まずは、言語人類学や認識人類学の先行研究を通じて、本研究の立脚点である「言語と環境」の考え方を検討し、とくにことばの認識機能について論じる。次に、主にココヤシに関する文化語彙を例に、ツバルの自然環境およびツバル人のくらしがいかにツバル語に映し出されているかを考察する。そのうえで、今後のツバル語文化語彙研究のための道筋の整備を試みる。

2. 文化語彙研究における言語と自然環境

どの言語にも共通して存在していそうな意味内容をもつ単語群を「基礎語彙」と呼ぶのにたいして、ある集団固有の文化によって存在が条件づけられるような単語群を「文化語彙」という(中川2017)。中川によると、文化語彙は2種類に大別できる。ひとつは、「その言語が話されている自然や社会の環境に特有の事物・事象やそれらに関する細かい類別が認識され、名詞・形容詞・動詞のような単語の形が与えられる」(中川2017:4)タイプである。たとえば、めずらしい動植物、地形、道具、狩猟方法などを表現するために単語が割り当てられている場合がこれにあたる。もうひとつは、ほかの多くの言語も共有しており、基礎語彙に該当しそうな単語が、「その言語社会に独特な意味の広がりや狭まりをもったり、文化的価値をもったりする」(前掲書)タイプである。たとえば日本語の「スベル」という動詞が、「なめらかに移動する」という意味のほかに「うっかり言うてしまう(口が-)」、「試験に落ちる」、あるいは俗に「冗談がから振りに終わる」という意味の広がりを見せる場合である。

文化人類学者でありながら北米先住民の言語を研究したボアズは、民俗学的研究のもっとも重要な分野のひとつとして言語研究をあげている。それは、実用面からみれば、言語の実践的知識をもたずして民俗学の完全な識見を得ることはできないからである。また、理論面からみれば、人間の言語に現れる諸概念と民俗学的事象とは切りはなせないものであり、さらに、あらゆる民族のもの見方や慣習は、個々の言語的特徴に明らかに映し出されているからである(Boas 1911)。ボアズに師事し、アメリカ構造言語学を牽引したサピアは、話者の自然環境、社会環境をもっとも明らかに映し出すのはその言語の語彙であるとし、語彙は人々の考え方や関心事を貯蔵する知の宝庫であると述べている(Sapir 1912)。そうであるがゆえに、われわれは母語のなかに文化や環境の異なる地域で育まれてきた言語には翻訳できない語の数々を容易に見つけることができるのである。本稿では、このような民俗学的言語研究の視座によって立ち、とりわけ文化語彙に焦点をあてて、ツバル語がツバル人の文化・慣習をふくむ環境世界をいかに映し出しているかということの一端を考察する。

語彙研究の重要性は、ある文化を秩序化・組織化する認識体系の発見をめざす認識人類学の分野でもしばしば論じられる。Conklin (1955)は、フィリピン・ミンドロ島に住むハヌノオ族の言語の民俗分類研究により、その語彙が1625種類もの植物を識別するなど、植物に関する知の宝庫であることを明らかにした。コンクリンによると、ハヌノオ語で表すことのできる植物の部位名称は150に及ぶ。このような植物の民俗分類が、彼らのくらしの中で、食用、薬用、道具の素材用など、どのように活用されているのか、コンクリンは詳細に記述している。また、動物についても、

地域に生息する家畜以外の鳥類を75種、蛇を約12種、魚類を50種にそれぞれ分類し、何千もの昆虫を108のタイプに範疇化する。このコンクリンの論文は、構造主義の黎明期にレヴィ=ストロースが著した『野生の思考』(1976)の冒頭にも、人間と環境の密接なかわりを論じるために引用されている。

Berlin & Kay (1969) の基本色彩語彙の研究は、98言語の調査により、基本色彩語の組み合わせおよび「進化段階 (evolutionary stages)」には、言語横断的な規則性があるという仮説を提示した。バーリンとケイによると、色彩語が1つしかない言語はありえない。もしある言語の色彩語が2つのみであれば、それらはかならず「白 (明)」と「黒 (暗)」に相当する語であり、これが進化の第1段階である。第2段階では、3つ目の色彩語が登場するが、それは決まって「赤」ないしその周辺色である。第3段階では、さらに「緑」か「黄」のいずれかが加わり、第4段階では「緑」「黄」の両方がそろそろ。第5段階では「青」が現れ、続いて第6、7段階と色彩語は増加するのである。彼らの研究は、のちに資料の不正確さを訴える反論を受けることになったが、人間が色を認識する仕方に言語のありようが関係しており、そこに多様性と普遍性があるということを見出した点で一定の評価がされた。

このようなコンクリンやバーリン&ケイの例は、いずれも民俗分類による語彙に関する研究の例である。松井 (1991:7) は、集団に固有の言語と生活様式が環境世界を主観的に仕分けているとし、とりわけ「名づける」という行為は「知覚の領域に秩序をもたらす、もっとも主要な方法」とであると述べている。つまり、諸言語の語彙の体系を明らかにすることは、人々が混沌たる世界を範疇化するその仕方を解明することと強く結びついているのである。

もうひとつ、比較的最近の研究の例をあげよう。モンゴルをはじめ世界の広範囲にわたる地域で危機言語の調査を行ってきた Harrison (2007) は、諸民族をとりまく環境と人々の慣習がいかに言語にかかわっているかを追究してきた。南シベリアの危機言語トファ語では、人々が生活の多くの部分を依存するトナカイに関する語彙が細かく分類されている。たとえば、「5歳の去勢した雄の乗用トナカイ (5-year-old male castrated rideable reindeer)」という高密度の情報を chary というひとつの単語が担っている。このような文化語彙は、彼らが日常の仕事をこなすうえで必要な、即座かつ正確にトナカイの年齢、性別、乗れるか否か、繁殖力、熟練などを判断するための貴重な知恵となる。さらに、Harrison (2010) は、言語が人間と諸環境とを結びつけていることの重大さを以下のように述べている。

… (諸言語の) 地域的な結びつきがなくなれば、人間という種全体とこの地球との結びつきも薄れ、資源を枯渇させずに使っていく能力も、この惑星を大切にするための判断力も失われていく。無人の砂漠から太平洋の珊瑚の海、アンデスの補油が空ヒマラヤ山脈のふもとまで、私たちが生半可な理解のまま生態系に大きな負担をかけてしまった地域がいくつも存在する。危機に瀕した言語こそ、こうした生態系およびその一員である人類の立場をより深く理解するための鍵なのである。(ハリソン2010:16)

言語の衰退や死滅には、大国のヘゲモニーや言語帝国主義によるもの、不均衡な言語接触やそれにもなう言語交替などによるものなど、種々の要因があげられる。しかし、言

語は母語集団をとりまく環境のなかで育まれるという観点からすれば、言語とそれが本来あるべき環境との関係が何らかの原因で絶たれたときこそが、言語衰退・死滅の危機であるということもできよう。その原因は、話者がもといた土地から別の環境へ移住したこともかもしれないし、もとの環境が近代化や欧米化によって変容したこともかもしれない。

しかし、Sapir (1912) のいうように、周囲のありとあらゆる環境が集団の言語のありようを決定づけるわけではない。人々をとりまく動植物や地誌学的性質がさまざま言語に反映するのではなく、むしろ重要なのは、そうした環境の特色への人々の関心があるか否かということである。ひとつ例をあげよう。日本国内の公園のすみや草むらを歩いてみれば、「雑草」とひとくくりにされる植物があちこちに生えている。われわれをとりまく自然環境の一部であるこれらの植物は、食用、薬用、観賞用などのいずれにも用いられず、普段人々の関心を集めることがないため、少なくとも世間一般に知られるレベルでは個々に分類・命名されていないのである。ところが、食料や薬の多くを野生の植物に頼っている民族の言語では、われわれが「雑草」と呼ぶような植物のひとつひとつに個別の名称を与えている場合がある。さらに、それらの植物が、ナマカ調理済みか、どのような色か、どのような成長段階にあるかなどによって異なる名称を付与していることさえあるのである (Sapir 1912)。日本語のコメと英語のriceの比較はこの種の例としてしばしばあげられる。米食を中心とする日本文化では、植物としてのイネ、収穫後の穀物としてのコメ、調理後の食品としてのメシ・ゴハンと名称が細分化されているが、英語ではriceの1語で済まされる。こうした事物・事象の分節法の違いは、2つの言語を比較すれば、日英語に限

らずどの言語にも見つけることができるだろう。ツバル語には、おびただしい数のココヤシ・ココナツに関連した語が存在する。成長段階、部位、調理の仕方、剥き方、用途などによってじつに細かく分節化されている。これは、ツバル人がココヤシ・ココナツに囲まれて生活しているということにくわえて、ココヤシ・ココナツに強い関心を持ち、相当に依存した暮らしを営んできたということに他ならない。

次章では、自然環境への適応戦略としての文化・言語に関する理論的枠組みを概観する。

3. 「文化生態系 = 言語生態系」理論

3.1 文化生態系 (川喜多1998)

川喜多 (1998) は、人間にとっての環境を、[主体 - 環境]系と位置づけ、主体があってはじめて立ちあられる概念であるとした。そのうえで、文化を、主体と環境を媒介する性格のものとし、「文化が相違すると、同じ自然でも自然環境としてもつ“意味”が異なってくる」と述べている。川喜多自身がいうように、この考え方の背景には、哲学者西田幾多郎の「歴史的世界の自己形成においては、主体が環境を限定し、環境が主体を限定する、人間が環境を作り環境が人間を作る。…ある民族がある土地に住むというには、そこに技術というものがなければならない。…技術とは人間と自然とを結合するものである。」という主張がみられる (西田1940; 現代仮名遣いは筆者による)。川喜多は、西田のいう「技術」を文化、とりわけ「技術的・生物学的文化」ととらえ、さらに文化にはもう2つの側面があることに言及する。すなわち家族・親族・コミュニティ・徒党・政府などの編成・組織にかかわる「社会組織としての文化」、および主体をなす社会がどう感じ、考え、意欲し、知識を行使するかという「価

価値観・世界観としての文化」である。これら3つの側面は、ばらばらに存在するわけではなく、それぞれが有機的関連性をもち、構造をなして文化全体を形成している。川喜多は、このような〔社会 - 文化 - 環境〕の構造を「文化生態系」として、図1のように示した。

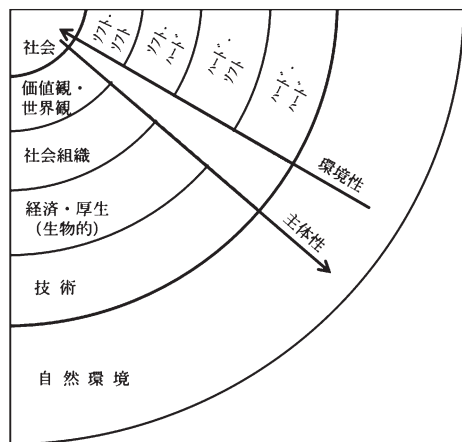


図1 文化生態系の文化構造 (川喜多1998)

主体たる社会と自然環境との間に文化が存在し、これが双方の間をとりもっている。社会から環境へ働く力を「主体性」、環境から社会へ働く力を「環境性」とした。文化のなかでも技術としての文化がもっとも環境に直接的・有形的にかかわっており、いわばハードウェアとしての性格が強い。次いで環境に近い位置にあるのは、経済・厚生といった生物学的文化である。反対に、社会組織としての文化は環境と間接的なかわりをもつ位置にあり、価値観・世界観としての文化は、もっとも無形的で、社会と密着しており、ソフトウェアとして環境に働きかける。このようにみると、文化とは、人間が生きるために主体的に環境に働きかける適応戦略の手段であるということがわかる。

しかし、川喜多の文化生態系の理論には、言及されていない重要な点がひとつあるので

はないか。それは、文化の諸側面、すなわち価値観・世界観、社会組織、経済・厚生、技術のいずれにおいても、言語が前提となっていなければならないということである。次項にて、環境の認識にかかわる言語についてみていく。

3.2 言語生態系

宮岡 (1996, 2002, 2015) は、人間にとっての環境を、自然環境、社会環境、超自然界の3つからなる集団主体的な「環境世界」と位置づける。すなわち人間集団は、「動物の一種として組みこまれた自然環境にくわえて、みずからその一部を構成している社会環境、さらには、みずから構築してきた超自然界 (幽界・霊界・神話的世界) がしばしば渾然一体となった〈環境〉に身をおいている」(宮岡2002: 23) ののである。宮岡によれば、人間は、混とんとした連続的世界 (カオス) をことばによって秩序化された非連続的世界 (コスモス) に変える。これは環境の働きかけにたいする人間固有の適応戦略であり、この戦略こそが環境と対峙するためのクッションの役割としての文化である。そうであれば、文化をもって環境と相互に作用しあう人間の生活世界は「文化生態系」ということができる。しかし、この文化の構築には、そもそも環境を分節化するための言語が必要なのであり、その意味において、文化生態系は「言語生態系」と呼ぶべきものであろう。宮岡 (2002) は、言語の環境世界との深いかわりについて以下のように述べる。

…人間は「環境」の認識にふかくかかわっているその言語によって他者との伝え合いをはかりつつ、その認識のありように直結した「環境」への適応戦略をとっていくものだとすれば、言語は文化

の中核をなすと言うよりも、「言語こそ文化である」と言わなければならない。「文化」をこのように理解するならば、その集団が生活している環境とは、たんに「文化生態系」というよりも、言語がグローバルに浸透した生態系—いわば「言語生態系」—をなすとさえ言えるかもしれない。(宮岡2002:26)

宮岡はこのような考え方を図2にまとめている。図中の言語1~3は、それぞれことばの認識(思考)機能性、伝達機能性、直接機能性を表している。認識(思考)機能とは、森羅万象を切り分け、範疇化するための言語の根源的な機能である。人間は言語を用いて客観的世界を「選択的にみずからの環境にとりこみ、集団独自の認識のしかたにしたがい、細かく階層的・多重的に整理・分類」し、さらに「〈命名〉をほどこし、カタチとしての〈語〉などとして慣習的に固定化」する(宮岡2015:26)。したがって、人間を取りまくいっさいの環境(それが自然環境であれ、社会環境であれ、超自然環境であれ)は、言語

を通して認識されるのである。このような言語機能が、個々の言語の根底にあるとするならば、この考え方はSapir (1921)の「言語は、ひとつの構造として、その内面においては思考の鑄型(the mold of thought)である」という表現と軌を一にするものといえよう。

図2は、宮岡のいう言語生態系を整理したものである。図中で生態系のすべてを下支えている「言語1」が、言語の認識機能である。しかし、言語の機能は認識機能だけではない。もっとも一般的に理解されている言語機能である「伝達機能」が図中の「言語2」である。モノ、技術とともにいわば「道具」として機能する「言語2」は、同じ社会に生きる人々との伝え合いを通じて連携をとりつつ、環境への適応をはかるために用いられる。最後に、「言語3」は、言語の直接機能性を表している。換言すれば、言語を「話すこと」ないし「使うこと」自体に働く機能である。たとえば、言語の紋章性がこれにあたる。すなわち、移民同士、家族、恋人同士、仲間うちなどで、特定のことばを共有・使用することによってアイデンティティを確認しあったり、強めた

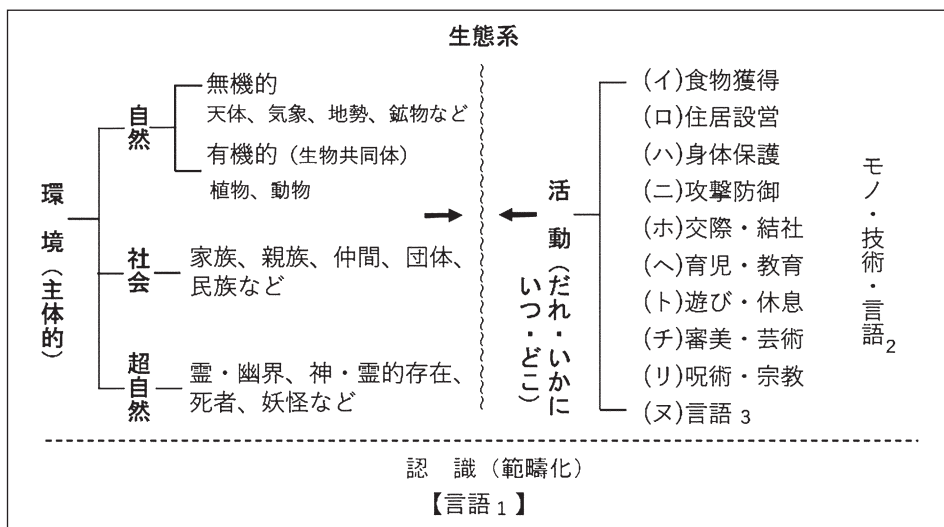


図2 文化の基本的な仕組み (宮岡2015)

りするような性質である。ほかに、場を和ませるためのあいさつ、儀礼における決まり文句、アジ演説、流行語の使用などが考えられる。

以上、宮岡の「言語生態系」理論について概観した。筆者の関心事であり本稿のテーマである民俗分類や文化語彙の研究がめざすものは、諸民族が言語外現実をいかに切り分けているかということの解明である。したがって、3つの言語機能のうちもっとも関係してくるのは、認識機能ということになる。

4. ツバル語の文化語彙に関する先行研究

ツバルや英国保護領・植民地時代のエリス諸島の歴史・伝統文化などに関して記された文献は少なくないが、ツバル語の民俗分類や、その結果としての文化語彙に関する先行研究はさほどない。民俗分類・文化語彙研究の例としては、Chambers (1981) があげられる。Chambersは、認識人類学の観点からバーリン&ケイの色彩語彙研究をもとにして、ツバルの離島ナヌメア島で島民の色彩語彙調査を実施した。その後、Chambers (1984)、Chambers & Chambers (2001) などで、ナヌメア島のテフォラハ神話や島の伝統文化について論じているが、認識人類学的論考ないし言語学的分析としての文献は、上記の色彩語研究のみといってよい。Chambersはこの研究で、ツバル語はバーリン&ケイの色彩語進化のうち第5段階、つまり黒、白、赤、緑、黄、青の6色彩語を有する段階にあたと結論した。一方で、離島バイツプ島の文化に関するフィールドノートとして提出されたKennedy (1938) では、バイツプ島において色彩語と認められるのは、白(明るい色)と黒(暗い色)のみであり、そのほかの色彩のほとんどは何らかの自然現象にもとづいて命名されたものと論じている。すなわち、青はlanu moana (海の

色)、緑はlanu launiu (ココヤシの葉の色)、lanu kefu (枯葉の色)、lanu talakisi (タラキシ[魚の一種]の色)という具合である。このケネディの論について、Chambers (1981) は、現在のバイツプ島やナヌメア島の事実には決して当てはまらないと述べている。

Kennedy (1938) は色彩のほかにも、時間、釣り、カヌー、身体語を用いた計測単位、食事・料理、遊び、歌、宗教、民話、医療、病気、出産、住居、物質文化などについて記述している。また、ドイツの文化人類学者コッチは、『ツバルの物質文化 (The Material Culture of Tuvalu)』(Koch 1961)において、衣食住、カヌー、武器、楽器、埋葬などにまつわるツバルの物質文化について、イラストを交えてわかりやすく論じている。しかし、Kennedy (1938) やKoch (1961) は、部分的に文化語彙に言及してはいるものの、いずれも文化人類学的な考察を中心とした民族誌的文献であり、ツバルの文化や生活から言語のありようを分析し、体系化するといった類のものではない。なお、ツバル語の語彙に関して参照すべき文献としては、Jackson (1993, 2010) による『ツバル語辞典』、Ranby (1980) の『ナヌメア語彙集』などの辞典、語彙集などが挙げられる。また、筆者は今後、植物に関する文化語彙研究を進めていくつもりであるが、その際には、Thaman (2016) やThaman, Fihaki, Fong (2012) などのツバルでみられる植物をまとめた辞典(図鑑)類も参照する。

筆者の文化語彙研究は、上記のような文献を参照しつつ、フィールドワークによりそれぞれの語彙をツバルの環境と文化のなかで捉えなおす作業といえる。次章では、筆者がツバル語文化語彙研究の第一歩としてココヤシに関する語彙調査をした内容のうち、現時点で明らかである事柄についてまとめる。

5. ツバル語のココヤシに関する文化語彙と自然環境

ここでは、自然環境への適応戦略としてのツバル語のありようを、ツバル人が生活の多くの部分を依存しているココヤシに関する文化語彙に焦点を当ててみていく。

ツバルは、南太平洋に浮かぶ9つの島からなる島嶼国である。世界で4番目に小さな国であり、全国土の面積を合わせてもわずか26km²ほどしかない狭小な島国である。土地が脆弱で、海拔も低く、真水が手に入らないため、生活用水はタンクにためた雨水に頼っている。農業に不向きな環境であり、植物の成長にとってきわめて過酷な環境といえる。島民の生活は、野生の植物であるパンダナスのほかに、厳しい環境下でも育つココヤシ、パンノキ、バナナなどの果樹や、タロ、プラカなどのイモ類にその多くを依存している。なかでもココヤシは、パンノキやバナナのように入植者によってもたらされたものではなく、ヨーロッパ人の到来以前から栽培されて

おり (Koch 1961)、その用途は、建材、衣類、飲食物、器、籠、玩具、漁業用具、縄紐、着火剤とじつに多岐にわたる。

きわめて限定的な物質文化のなかで、ココヤシがいかに関わっているツバル人の生活に欠かせないものであり続けてきたかということは、彼らの言語にも反映されている。Koch (1961) には、衣食住をはじめ、カヌー、武器、薬品、玩具など多岐にわたるカテゴリーの物的産物が紹介されているが、ほとんどすべてのカテゴリーにココヤシが登場する。成長段階や部位、加工の仕方によってさまざまに分類・命名され、くらしのなかで用いられていることがよくわかる。図3は、筆者のフィールド調査をもとに整理した、ココヤシとココナツの成長段階による名称の変化を表したものである。ココナツには、飲用・食用に適した成長段階があり、果汁や果肉の質は段階によって変化する。また、果皮も成長段階によって器、娯楽のゲーム用目印、着火剤など、さまざまな用途に用いられる (Koch 1961)。表1は、コ

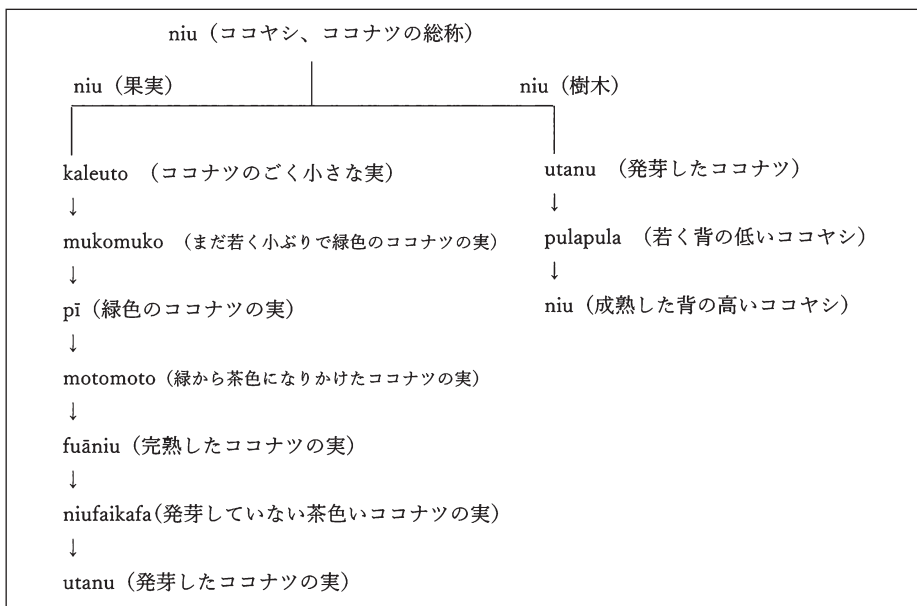


図3 ココヤシの成長をめぐる名称の変化

コヤシの葉と樹木の用途を部位別に示したものである。たとえば、葉状体の先端部分は sikusiku（北部方言では māikuiku）と呼ばれ、おもにハエ・蚊除けに用いられる。この先端部分は、見た目にわかる境界線があるわけ

はないし、植物分類学的にその他の部分と切りはなす根拠があるわけでもない。すなわち、集団に固有の文化的用途によって民俗分類され、集団固有の言語によって範疇化されたものである。

部位	用途
taume（仏炎苞）	先端を切ってヤシ汁を採集する。たいまつやトングに用いる。
kaumoe（若く開いていない葉）	うちわや籠を編む。舞踊用のスカートに用いる。
launiu（若い緑色の葉）	ござ、皿、籠、うちわを編む。屋根材、ゲーム用ボール、舞踊用スカート、玩具の風車、調理用の魚の包みなどに用いる。
kaulama（古く茶色い葉状体）	ブラインド、皿、ゴミ箱、たい肥用の籠などを編む。屋根材、漁業用たいまつ、花輪、たい肥、薪などに用いる。
kalava（茎の表面の硬い部分）	適当な太さに裂いて様々なものを束ねるために用いる。
palalafa（葉状体の茎）	物を運ぶ際のかつぎ棒、料理の際のかき混ぜ棒、屋根材、魚を運ぶためのベルト、部屋の間仕切り、井戸のふた、薪、クリケットのバットなどに用いる。
kautuāni（葉の中肋）	ほうき、籠、ハエ除け、玩具の風車やカヌーなどをつくる。爪楊枝、魚料理の串、漁業のための矢などに用いる。
sikusiku（葉状体の先端部分）	先端を結んでハエ除け、茂みに入った際の蚊除けなどに用いる。乾燥したものは着火剤として用いることもある。
kaka（茎の付け根の繊維状のもの）	削り下ろしたココナツからミルクやオイルをろ過するためのフィルター、植物薬、着火剤などに用いる。
pokofa（茎の付け根の太い部分）	薪として用いる。

表1 ココヤシの葉と樹木の部位別用途（Koch 1961を参考に橋作成）

自然環境の特質をその地域の言語の語彙のなかに見出すのは難しいことではない。サピア（Sapir 1912）は、そのことはとくに原初的な生活を営む民族の言語に当てはまることだという。すなわち、彼らの文化は普遍的な関心を示す複雑さの段階に至っておらず、原初的な言語の語彙は、文明化された民族のなかの特定地域の人々の語彙に匹敵するといわれる（Sapir 1912: 228）。さらにサピアは、北米の沿岸地域に住むヌートカ族を例にあげ、彼らの言語が豊富にもつ海洋生物や脊椎・無脊椎動物などの種に関する正確な用語が、フランス南西部やスペイン北部のバスク人の漁民における語彙に匹敵しうると述べている（Sapir 1912: 228）。ツバル語におけるコ

コヤシの用語の豊富さは、まさに南太平洋島嶼部の自然環境の特徴が言語に反映された例といえることができるだろう。

ツバル語のココヤシに関する語の特異性は名詞のみならず動詞にもみることができる（表2）。たとえば、「～の皮を剥く」という動詞にあたるツバル語は、一般的に fole であるが、「ココナツの皮を剥く」という場合、oka が用いられる。oka は sua（南部では koho）と呼ばれる先端のところが棒にココナツを突き刺して、両手に体重をかけながら外果皮を剥く行為であるが、これとは別に、keti という「ココナツの皮を歯で剥く」という動詞も存在する。これらは一般に用いる fole に比べて情報密度の高い文化語彙といえる。また、

「登る」という動詞には、一般的に用いられる kake とは別に、ココヤシの木に登る行為のみに用いられる語が存在する。さらに、筆者が聞き取り調査をおこなったナヌメア島出

身者によると、登り方によって表2のように tike と kakefakatamana の2種類に使い分けられるという。

一般		ココヤシ	
皮を剥く	Fole	oka	ココナツの皮を剥く
		keti	ココナツの皮を歯で剥く
登る	Kake	tike	ココヤシの木に登る (足にロープをかけて、あるいはかけないで、しゃがむような姿勢から両足を同時に動かして飛び跳ねるようにして登る) (Jackson 2010)
		kakefakatamana	ココヤシの木に登る (ロープなしで手足を左右交互に動かして登る) kake (登る) + faka (~のように) + tamana (父親): 「父親のような登り方」、昔ながらの登り方

表2 動詞「ココヤシに登る」の文化語彙

6. 今後の展望

以上、これまでの調査で明らかになったココヤシに関する文化語彙についてまとめた。本章では、今後の研究展望を述べたい。ここまでみてきたように、ココヤシはさまざまな場面においてさまざまな用途をもつ、ツバル人の生活に欠かせない植物である。今後の展望としては、まずこのココヤシに関する文化語彙調査をより詳細に行いつつ、ツバル人が生活に利用するその他の植物の分析も進め、「植物文化語彙」として体系化する。分類法としては、Conklin (1955) をはじめとする複数の民俗分類調査の先行研究を参照し、植物の生活利用を用途別に7つの項目にわけた山田 (1977) の方法を用いて、以下のように分類する。

- ・生活維持…食物, 生活用具, 生産道具, 燃料, 飼料, 肥料, 魚毒
- ・住…建材, 防風
- ・衣
- ・工芸及び特殊用途…染料, 結束, その他
- ・薬

- ・儀礼・忌避等
- ・娯楽…遊び, 観賞

しかし、「言語と環境」のかかわり合いの研究において、植物というカテゴリーは、当然ながら全体の体系のごく一部に過ぎない。すなわち、図1に示した宮岡 (2015) の枠組みにしたがえば、植物は、人間の環境世界を形成する「自然環境」、「社会環境」、「超自然環境」のうち「自然環境」の一部分である。したがって、植物の語彙を皮切りに、今後、以下のようなカテゴリーに関する調査が必要になる。下の表は、ツバル語研究のために、筆者が宮岡 (2015) の枠組みから取捨選択・追加してまとめたものである。

主 人 的 環 境 お け る	自然	無機的・・・天体, 気象, 地勢など
		有機的・・・植物, 動物
	社会	家族, 親族, 仲間, 民族など
	超自然	霊・幽界, 神・霊的存在, 死者, 神話世界など

上記は、人間が主体的かかわりをもつ環境を「自然」「社会」「超自然」のうちに網羅的

に示しているが、これらすべてのカテゴリーをまとめあげる文化語彙研究は、かなりの時間と労力を要するはずである。くわえて、研究者の相応の能力も求められる。そこで、今後さしあたり筆者が取り組むべき項目は、「自然」のカテゴリーにしぼることとし、ツバルの無機的・有機的自然にたいする適応戦略としてのツバル語のありようを追求したい。

自然環境を第一にとりあげる理由としては、島自体の近代化による自然環境の変化があげられるが、そのほかに、ニュージーランドをはじめ国外へ移住をするツバル人が少なくないという事実をあげておかねばならない。ニュージーランド政府の統計によれば、2013年の時点でツバル人移民の人口は3,537人である。人口は年々増加しており、2001年から2006年にかけては33.6%、2006年から2013年にかけては34.7%と、かなり大幅な増加がみられた。かの地においても、多くの大人は、ツバル人として次世代に継承したいと彼らが考える伝統や文化を、子どもたちに伝えるよう努めている。彼らはコミュニティを形成し、毎週末の教会への礼拝や年一度の文化の祭典、祝祭日のお祝い、死者が出た際の葬儀などを通じて、可能なかぎり社会的・超自然的環境を共有しているのである。しかし、自然環境に関しては、そうはいかない。移住という選択によってもっとも大きく変化してしまう環境は、自然環境にほかならないのである。「環境人類学 (environmental anthropology)」を標榜する Townsend (2000) のいうように、「環境に関する伝統的な知識の体系は、それを取りまく自然環境の喪失に脅かされるだけでなく、その知識の体系をコード化する言語の喪失にも脅かされて」いる(岸上・佐藤訳, 2009)。こうした理由から、筆者は自然環境とツバル語の関係性を明らかにすることが急務であると考えている。

7. おわりに

以上、ツバル語の文化語彙研究について、「言語と環境」理論の枠組みを提示し、民俗分類の先行研究を参照しつつ論じてきた。本稿の目的は、ツバル語文化語彙研究に関して初期段階にある筆者のこれまでの研究成果をいったんまとめ、理論的枠組みに従って、今後の研究展望を述べることであった。現時点での筆者の研究対象は、ツバルの自然環境のうち、彼らの暮らしに多岐にわたって用いられるココヤシ・ココナツに関する文化語彙である。本稿では、ココナツの成長段階別名称とそれぞれの段階における用途、ココヤシの葉と樹木の部位別用途をまとめるとともに、ココヤシのみに用いられる動詞について論じた。今後の展望としては、引きつづきココヤシの語彙を詳細に調査するとともに、植物・動物の有機的環境、気象や地勢などの無機的環境をふくむ自然環境を中心に調査を進め、「植物文化語彙」の体系化を目指すことを第一課題とした。本稿で定めた研究の方向性にしがたって、今後の研究を進めていきたい。

参考文献

- 川喜多二郎 (1998) 「環境と文化」河村武・高原榮重編『環境科学Ⅱ－人間社会系』朝倉書店
 篠原徹 (1990) 『自然と民俗－心のなかの動植物』日本エディタースクール出版部
 中川裕 (2017) 「カラハリ狩猟採集民の語彙研究から言語の普遍性と多様性の理解へ」『フィールドプラス』No.18, 2017年7月10日 [第18号] 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
 西田幾多郎 (1940) 『日本文化の問題』岩波書店
 松井健 (1983) 『自然認識の人類学』どうぶつ社
 ——— (1991) 『認識人類学論攷』昭和堂
 ——— (1997) 『自然の文化人類学』東京大学出版会
 宮岡伯人 (1996) 『言語人類学を学ぶ人のために』

- 世界思想社
- (2002) 「消滅の危機に瀕した言語－崩れゆく言語と文化のエコシステム」宮岡伯人・崎山理編『消滅の危機に瀕した世界の言語』明石書店
- (2015) 『「語」とはなにか・再考－日本語文法と「文字の陥穽』三省堂
- 山田孝子 (1977) 「鳩間島における民族植物学的研究」『親類の自然誌』雄山閣
- レヴィ＝ストロース, クロード (1976) 『野生の思考』大橋保夫訳, みすず書房
- Berlin, Brent & Paul Kay. 1969. *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. University of California Press.
- Besnier, Niko. 2002. *Tuvaluan: A Polynesian Language of the Central Pacific*. Routledge.
- Boas, Franz. 1911. *Introduction to Handbook of American Indian Languages*. Vol.1, Bureau of American ethnology, Bulletin 40. Washington: Government Print Office.
- Chambers, Keith. 1981. Color Categorization in Nanumea: A Polynesian Atoll Society. *Kroeber Anthropological Society Papers*. Vol. 57-58: 65-97.
- Chambers, Keith. 1984. *Heirs of Tefolaha: Tradition and Social Organization in Nanumea, A Polynesian Atoll Community*. Ph.D. Thesis, Berkeley: University of California.
- Chambers, Keith and Anne Chambers. 2001. *Unity of Heart: Culture and Change in a Polynesian Atoll Society*. Waveland Press, Inc.
- Conklin, Harold Colyer. 1955. *The relation of Hanunóo Culture to the Plant World*. Ph. D. Thesis, Yale University.
- Harrison, David. 2007. *When languages Die: The Extinction of the World's Languages and the Erosion of Human Knowledge*. Oxford University Press.
- . 2010. *The Last speakers: the quest to save the world's most endangered languages*. National Geographic Society.
- Jackson W. Geoffrey. 1993. *Te Tikisionale o te 'Gana Tuvalu*, Oceania Printers.
- . 2010. *Tuvaluan Dictionary: Tuvaluan-English & English-Tuvaluan*, Oceania Printers.
- Kennedy, Donald Gilbert. 1931. *Field Notes on the Culture of Vaitupu, Ellice Islands*. The Polynesian Society, Memoir no.9.
- Koch, Gerd. 1961. *The Material Culture of Tuvalu*, (translated by Guy Slatter), the Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific, Suva, Fiji.
- Lynch, John. 1998. *Pacific Languages: An Introduction*. University of Hawai'i Press.
- Ranby, Peter. 1980. *A Nanumea Lexicon*, The Australian National University.
- Sapir, Edward. 1912. Language and Environment, *American Anthropologist, New Series*, Vol. 14, No. 2, pp. 226-242, The American Anthropological Association.
- . 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt, Brace and Co.
- Thaman, Randolph Robert. 2016. The Flora of Tuvalu: Lakau mo Mouku o Tuvalu. *Atoll Research Bulletin*. no.611. Smithsonian Institution Scholarly Press.
- Thaman, Randy, Eliala Fihaki, and Teddy Fong. 2012. *Plants of Tuvalu: Lakau mo Mouku o Tuvalu*. The University of the South Pacific Press
- Townsend, Patrisia. 2000. *Environmental Anthropology: From Pigs to Policies*. Waveland Press, Inc. 『環境人類学を学ぶ人のために』岸上伸啓・佐藤吉文訳 (2009).

ウェブサイト

Stats NZ. 2013 Census Ethnic Group Profiles: Tuvaluan. http://archive.stats.govt.nz/Census/2013-census/profile-and-summary-reports/ethnic-profiles.aspx?request_value=24724&tabname=Populationandgeography